早稲田大学ロシア文学会ニューズレター

2024.11.20.

Вестн №62

〒162-8644　東京都新宿区戸山 1-24-1
早稲田大学文学部露文コース室
tel: 03-5286-3740
e-mail: robun@list.waseda.jp
https://www.waseda.jp/bun-russia/

● 会員の近況より
　特殊な情勢下でのバルト三国の一つリトアニアでのロシア語留学　鈴木理秀
　公開講演会「労音によるロシアバレエ普及」傍聴記　河城瑞季
● 会員の新刊情報
● 早大ロシア文学会維持会員制度についてのお願い
● 学会だより
● 「井桁貞義先生を偲ぶ会」のお知らせ

会員の近況より

今号では、露文 2 年生の鈴木理秀さんがリトアニア留学の体験記を、大学院修士課程の河城瑞季さんが 6 月 15 日に開催された春季公開講演会の傍聴記を寄せて下さいました。

特殊な情勢下でのバルト三国の一つリトアニアでのロシア語留学

鈴木理秀

力による一方的な現状変更が各地で起こっている情勢の中、多くのロシア語学習者がロシア本国への留学を避ける、または諦めざるを得ない状況が続いている。このような状況下で、ロシア語学習者たちは中央アジアやバルト三国など、歴史的背景からロシア語が比較的使用されている地域を留学先として選択し、新たな学習の機会を模索している。私もその一人であり、今年 9 月から約 1 年間、バルト三国の一つリトアニア共和国のヴィリニュス大学でロシア語を中心に学習している。

現在、早稲田大学のロシアやベラルーシへの正規プログラムは機能しておらず、留学センターを通しての当該地域への交換留学は不可能である。しかし、エストニア、ラトビア、リトアニアの大学との提携は維持されており、英語力などの条件をクリアすれば他の西側諸国と同様に 1 年間現地で学ぶことができる。私はこの制度を利用し、作曲家チュルリョーニスやリトアニアの原始宗教などに個人的な関心があったことからリトアニアへの留学を決めた。

渡航前の夏休みにインターネットでリトアニアにおけるロシア語やロシア人の状況を調べたところ、リトアニア語話者による強い反露感情やロシア語話者との断絶など、ロシア語学習者には厳しい情報が多く見受けられた。そのため、実際にロシア語を実践的に学べるのか不安に感じる日々が続いた。

しかし、いざ学期が始まると、ロシア語の実践的な授業や、政治的・情勢的な理由でウクライナやベラルーシから移住してきた学生とのロシア語での交流を通じて、予想以上に多くの機会に恵まれ、不安は杞憂に過ぎなかったことに気づかされた。首都ヴィリニュスの人口の約 22%がロシア語話者という統計もあり、街中でロシア語を耳にしない日はほぼなく、市民同士のコミュニケーションでも広く使用されていると感じた。特に市場や交通機関、マルシュルートカなどでは英語が通じにくく、その際にロシア語力が大いに役立った。

私が通うヴィリニュス大学文献学部では、留学生が受講できるロシア語の授業が多く提供されている。今学期受講しているロシア語の授業は、A2 レベルのロシア語授業が 2 コマ、ロシア文学の授業が 2 コマ、そして「Современный русский язык（現代ロシア語）」と題された授業が 3 コマある。それに加え、リトアニアでしか学べない文化や歴史の講義も英語で受講している。A2 ロシア語の授業は、格変化や不定代名詞、тот же の使い方など、日本の大学ではあまり扱われない文法項目が徹底的に学ばれる。

ロシア文学の授業はロシア語で行われ、プーシキンの詩やドストエフスキーの作品分析が主な内容である。この前は『貧しき人々』の続編を、ドストエフスキーの特徴を踏まえて自分で創作するという課題が出た。最も重要な授業は「現代ロシア語」である。この授業は「プレゼンテーション」「口述筆記」「正書法」の 3 つのセクションに分かれ、「プレゼンテーション」ではロシア語で歴史的人物や文学、自分の大学などについて発表する。「口述筆記」はロシア語の作文練習で、毎回課題が出される。そして「正書法」では、ロシア語の正しい綴りを幅広い単語で学ぶ。初級レベルの単語（例：молоко）から、少々難しい単語（例：эстакада）、日本語でも馴染みのない単語（例：корифей）まで幅広く取り扱われ、毎日露和辞典をにらむ日々が続く。

学期開始当初は単語量の不足で授業についていくのが大変だったが、授業後に教授に質問を繰り返すことで少しずつ聞き取れるようになってきた。露文科の 2 年生としてはかなり良いレベルに到達していると信じたい。

最後に、特殊な情勢下にあるリトアニアの雰囲気について述べたい。リトアニアはロシアやソ連の支配を経験した歴史があるため、反露感情は他の旧ソ連構成国と比べて強い。そのため、政府と市民が一体となったウクライナ支援が行われており、街を歩くとほぼすべての建物にウクライナの青黄の二色旗が掲げられている。市内のスーパーではリトアニア国旗とともにウクライナ国旗も販売されており、市民の本気度が伺える。一方で、西海岸のリゾート地ニダの観光案内所では、ロシアからの観光客がパゲゲイ国境を通じてカリーニングラードから訪れるという興味深い話も聞くことができた。リトアニアで銃弾が飛んでくる心配はないが、戦争当事国に囲まれているため、日常の中で「有事」を感じる場面も少なくない。

滞在期間はあと半年あるが、体感的には短く感じるに違いない。目の前の課題に取り組み、リトアニアでしか得られない学びを積極的に吸収していきたいと思う。

（露語露文コース 2 年生）

2024 年度春季公開講演会
斎藤慶子氏「労音によるロシアバレエ普及：エリート文化の大衆化」傍聴記

河城瑞季

2024 年 6 月 15 日、早稲田大学ロシア文学会春季公開講演会にて、斎藤慶子氏による講演「労音によるロシアバレエ普及：エリート文化の大衆化」が行われた。労音とは 1949 年に発足した音楽鑑賞団体「勤労者音楽協議会」の通称であり、「良い音楽を安く聴く」をスローガンに掲げながら国内外の音楽芸術の紹介につとめ、冷戦構造に翻弄された当時の日本にあって、ソ連のバレエ文化の普及にも継続的に貢献したという。講演では、文化運動としての労音、次いで労音におけるバレエ事業が取り上げられ、二つの日本のバレエ団の活動が具体的に検討された。筆者には馴染みのない分野だったものの、労音の会員による率直な声や、実際に上演された作品の詳細も盛り込まれており、当時の空気感が生々しく伝わってくる講演で、質疑応答も含めて非常に刺激的な一時間半だった。拙筆ではあるが、順を追って講演の内容を振り返っていきたい。

まず、文化運動としての労音である。戦後のサークル文化活動を背景に成立した労音は、大阪や東京をはじめ全国に展開し、1960 年代半ばには約 64 万人の会員を抱えたが、様々な政治的課題に直面する中で急速に衰退することになる。労音の会員は労働者だけではなく、女性や学生も多かったようで、音楽を純粋に楽しみたい層と、社会問題に意識的であることを重視する層が当初から混在しており、会員間の葛藤は機関誌『ひびき』の議論からも読み取れるが、このような志向のばらつきは出演者の側にも存在した。

次に、労音におけるバレエ事業である。労音でバレエ事業を行うメリットとして、興業の安定性を確保し、観客に安価で提供できることが挙げられる。ここで思い起こしたいのは、ハイカルチャーとローカルチャーの区別をつけないソ連において、エリート文化のバレエは大衆も享受できるものだったということである。そして、日本国内でそれに最も近い条件を備えていたのが労音、特に東京労音だと考えられるのだ。さらに、労音の上演ラインアップが伝統的なロシアバレエ作品だったことからも、労音がソ連のバレエ文化の普及に努めてきたことは明らかである。

講演の後半では、東京労音のバレエ公演を担っていた主な二つの団体、貝谷八百子バレエ団と松山樹子バレエ団の活動について取り上げられた。ここでの要点は、公演自体が成功したか否かではなく、バレエの大衆化についての考え方、およびその実現に向けた取り組みのプロセスそのものである。

貝谷八百子はエリアナ・パヴロワのバレエ教育を受け、ソ連のバレエに関する資料を手に入れながら上演を行っていた。驚くべきことに、彼女の 1955 年の『白鳥の湖』を目当てに労音の会員数が一挙に 6000 人増加し、東京労音が大飛躍する足掛かりになったという。バレエ作品を誰にでも分かるものにするという貝谷の演出は、ソ連芸術が目指すべき方向性として提唱された社会主義リアリズムにも通じるところがある。また、『ひびき』誌上での貝谷らダンサーと労音の会員による談話も紹介され、公演が好評を博したことがうかがえる一方で、ある会員は「満足できない」とはっきりと述べており、忌憚ない意見交換が行われていることが筆者には印象的だった。

松山樹子は、演劇の専門家や労音の会員とともに文化を作り上げるという方針のもと、日本のバレエを作ってほしいという会員の声に応え、スタニスラフスキー・システムによるソ連のバレエ方法論を踏襲しながら創作を行い、1964 年にバレエ『祇園祭』を上演した。会員の「バレエがわたしたちの生活の中から生まれた」という絶賛からは、大衆との隔たりを克服しようとする松山の狙いが成功したことが読み取れる。それにもかかわらず、競合団体の相次ぐ設立やマスメディアの発達、また日中・日ソ共産党の関係の悪化などを背景に、労音の会員数は急激に減少することになる。こうした状況の中、松山は『白鳥の湖』の新演出を手がけ、社会的なテーマを強調し階級闘争を明確に打ち出したが、集団主義的なメッセージが日本の労働運動と響き合う一方で、評論家の目には詩的情緒や舞踊表現が欠けているように映ったようだ。

貝谷と松山は、それぞれバレエの大衆化を目指しながらも、結果的には労音の会員数の減少を止められなかった。また、バレエ作品の創作に注目すれば、ソ連芸術が社会主義リアリズムに基づく分かりやすさの追求によって貧困化したという状況にも重なっていると指摘される。筆者にとって興味深かったのは、両者がソ連の文化を継承し理解を深めながらも、日本という土地に受け入れられるよう創意工夫を凝らした点に、各人各様の個性が現れていることだ。惜しむらくは、実際の舞台の写真や映像などがあまり残されていないことである。しかしながら本講演において、広範な資料の検討や背景となる社会や文化の分析とともに、労音の尽力による日本の大衆とロシアバレエとの出会いが、きわめて立体的に浮かび上がったのではないだろうか。

（大学院修士課程 2 年）

2024 年下半期会員の新刊情報（2024 年 11 月 20 日調べ）

五木寛之著『五木寛之傑作対談集Ⅰ』平凡社（2024/11）
五木寛之著『五木寛之セレクションⅤ【恋愛小説集】』新潮社（2024/10）
五木寛之著『五木寛之×栗山英樹　「対話の力」』NHK 出版（2024/10）
五木寛之著『人生のレシピ　百歳人生の愉（たの）しみ方』NHK 出版（2024/10）
五木寛之著『こころは今日も旅をする』新潮社（2024/8）
五木寛之著『人生のレシピ　日々の喜びの見つけ方』NHK 出版（2024/ 7 ）
五木寛之著『こころの散歩』新潮社（2024/5）
鎌田慧著『真犯人出現と内部告発』皓星社（2024/11）
鎌田慧著『冤罪を追う』皓星社（2024/9）
桑野隆著『トルストイ『三つの死』でまなぶロシア語』水声社（2024/7）
三木卓『単行本未収録作品集　ヌートリア』（2024/10）
時田昌瑞著『ことわざ探検のススメ』（2024/8）
石川陽平著『プーチンの帝国論：何がロシアを軍事侵攻に駆り立てたのか』（2024/9）
清水陽子訳、マーシャ・ロリニカイテ著『マーシャの日記 その後：旧ソ連のユダヤ人差別』（2024/8）

＊著書を上梓された会員の方は、ぜひ編集部までご一報ください＊

早大ロシア文学会維持会員制度についてのお願い

早大ロシア文学会の「維持会員制度」は、すでに多くの方々からのあたたかいご支援を頂戴しております。おかげさまで、毎年『ロシア文化研究』を発行することができております。『ロシア文化研究』発行の他にも、ニューズレター「ヴェスチ」の発行・送付、春季公開講演会の諸費用等にも、皆様より寄せられた会費が充てられております。

この制度は、会員の方々から広く「維持会員」を募り、維持会員になっていただいた方には、その年度の『ロシア文化研究』を年度末の発行に際して 1 冊お送りするという制度です。学会誌・ニューズレターの発行、講演会の諸費用等は大学からの補助だけではまかないきれません。会員の皆様には、本学会が担い続けている、日本のロシア文化研究の中心的役割をご理解のうえ、ぜひともご支援をお願い申し上げる次第です。一人でも多くの会員の方々からご支援を賜りますよう、お願いを申し上げる次第です。維持会員になっていただけます方は、以下の要領にてご送金くだされば幸いです。

(1)　年会費は 1 年につき 2,000 円となります。
(2)　維持会員費納入には、同封の郵便振替用紙をご利用ください（口座番号　00160-7-87172　加入者名　早稲田大学ロシア文学会）。差出人欄には、住所と氏名だけでなく、郵便番号と電話番号も必ずお書きください。
(3)　複数年のお振込みをいただいた方には、自動的にその年度発行分以下、『ロシア文化研究』を、発行され次第、順次、送本申し上げます。
(4)　『ロシア文化研究』は、年度末に発行されます。従いまして、前年度の『ロシア文化研究』をご希望の方は、振込用紙の通信欄に、その旨、お書き添えください。

少しでも多くの皆様のご協力とご支援を重ねてお願い申し上げます。

学会だより

○　2024 年 6 月 5 日（水）～7 日（金）に露文コースの合宿が軽井沢セミナーハウスで行われました。
○　2024 年度総会・春季公開講演会が 6 月 15 日（土）に催されました。講演会では、斎藤慶子氏（早稲田大学文学学術院講師（任期付））に「労音によるロシアバレエ普及」と題してご講演いただきました。この講演会の傍聴記はニューズレター本号に掲載されています。
○　2024 年 7 月 24 日（水）、2024 年度文学研究科ロシア語ロシア文化コース修士課程在籍者で、修士論文提出予定者 5 名による修士論文中間発表会が行われました。

＊ヴェスチに情報掲載を希望される方は、編集部まで原稿をお寄せください＊

「井桁貞義先生を偲ぶ会」のお知らせ

2024 年 8 月 22 日に井桁貞義先生がご逝去されました。早稲田大学ロシア文学会では、2025 年 1 月 18 日（土）に「井桁貞義先生を偲ぶ会」を執り行います。すでにご承諾いただいている数名の方にご登壇いただき、先生との思い出についてお話しいただく予定です。

●井桁貞義先生を偲ぶ会

日時　　2025 年 1 月 18 日（土）　14 時 00 分から（17 時終了予定）
会場　　早稲田大学戸山キャンパス 34 号館 453 教室
参加申し込み　不要

＊会の終了後に、会食の場をご用意しております。

日時　　２０２５年1月１８日（土）　１８時００分から
会場　　レストラン「森の風」　早稲田大学早稲田キャンパス 26 号館 15F　立食形式
参加費　　お一人当たり 6,000 円（お食事に飲み放題付）

参加申し込み

会食へのご参加には事前のお申し込みが必要です。右の QR コードまたは下記 URL から申し込みフォームを送信してください。
https://forms.gle/A4uVv4EQNy3YtAMz5

お申込み締め切りは 2024 年 12 月末日です。ただし受付できますのは、**先着 70 名様**までです。QR コードを使用できない方は、露文コース室（住所は 1 ページ目上に記載）宛てに e-mail、はがき等でお知らせください。